

# 国定教科書 『私たちの道徳』を読む

小林 朗

はじめに

安倍内閣は「愛国心」などを評価する危険性を伴う道徳の教科化を二〇一八年度に実施しようとしている。教科書となる文科省編の新「心のノート」の五〇〇万部作成などに六億円増の一四億円を計上している。いじめをなくすという名目で道徳の教科化を文科省は主張しているが、本来の意図は政府の施策を是認する人間を育成しようと考えている。

本稿は、「心のノート」を改訂して学校配布になった読み物資料である副読本の「私たちの道徳」の内容について、その問題点を分析したい。

この資料は検定もないため、まさに国定教科書である。

道徳の教科化のパイロット的な役割を果たしている。

一 「何かおかしい？」

「私たちの道徳」は中学校の場合、三年間使用する教材である。構成は、文章や資料、「読み物」「人物探訪」「この人のひと言」「メッセージ」になっている。

(一) 生き方の押しつけ

「私たちの道徳」の内容は四部構成になっている。

「一 自分を見つめて伸ばして」「二 人と支え合って」「三 生命を輝かせて」「四 社会に生きる一員として」である。

この項目の最初にねらいと称して、結論が出ている。

子どもたちは文書や読み物資料を読む前から、こういうことが言いたいのだとわかってしまう。上記の四部構成に以下のようなねらいが載っている。

前述の一には「(一) 調和のある生活を送る、(二) 目標を目指してやり抜く強い意志、(三) 自分で考え実行し責任をもつ、(四) 真理・真実・理想を求め人生を切り拓く、(五) 自分を見つめ個性を伸ばす」とある。二には「(一) 礼儀の意義を理解し適切な言動を、(二) 温かい人間愛の精神と思いやりの心を、(三) 励まし合い高め合える生涯の友を、(四) 異性を理解して尊重して、(五) 認め合い学び合い、(六) 人々の善意や支えに応えたい」となっている。三は「(一) かけがえのない自他の生命を尊重して、(二) 美しいものへの感動と畏敬の念を、(三) 人間の強さや気高さを信じ生きる」になっっている。四は一番、目標が多く、一〇の項目がある。「(一) 法やきまりを守り社会で共に生きる、(二) つながりをもち住みよい社会に、(三) 正義を重んじ公正・公平な社会を、(四) 役割と責任を自覚し集団生活の向上、(五) 勤労や奉仕を通して社会に貢献する、(六) 家族の一員としての自覚を、(七) 学校や仲間を誇りをもつ、(八) ふるさ

との発展のために、(九) 国を愛し、伝統の継承と文化、(一〇) 日本人の自覚をもち世界に貢献する」となっている。

最後の四のねらい、結論を子どもたちに身につけさせたのは見え見えである。四部の目標はすべて至極ごもつともであるが、それだけにある意図が動いているように思える。つまり、この副読本のねらい通りに生きてくださいと暗黙に言っているようである。生き方の押しつけにもなっている。

(二) どういう人物を選んでいるのか？

「私たちの道徳」で最大の特徴は、「人物探訪」「メッセージ」(この人に学ぶ)と言える。取り上げている人物は以下の通りである。

香川綾、松井秀喜、上杉鷹山、湯川秀樹、山中伸弥、松下幸之助、若田光一、本田宗一郎、新島八重、山岡鉄舟、振分精彦(元高見盛)、緒方洪庵、大木聖子、アンネ・フランク、西村雄一、洪沢栄一、ガンディー、鈴木邦雄、鎌田實、濱口梧陵、西岡常一、嘉納治五郎の二十二人である。

これらの人々は人生で一定の成功を収めた人物とい

える。人物の写真の脇には、その人物が話した言葉が見出しになっている。いくつかの例をあげたい。

松下幸之助は「礼儀作法は堅苦しいものではなく

単なる形式でもない、社会生活の潤滑油です」と礼儀作法をことさら強調する。若田光一には「日本人の『思いやり』を世界が見ている」と「思いやり」を強く述べている。洪沢栄一には「いくら年をとっても人間を辞職するわけにはいかん」と人間は社会に役立つ存在であれと激励を飛ばしている。

人物の選出も文科省らしいが、それ以上に見出しは子どもたちに「ガンバレ、ガンバレ」とエールを送っている。現在の社会自体がガンバレ主義ではどうにもならないのに繰り返し、「ガンバレ」を唱えている。基本的には明治以来の立身出世主義を推奨している。

### (三) 出典がない

裏表紙の前に、出典・引用が掲載されているが、すべての文章や読み物資料に対してあるわけではない。出典がはつきりさせないのはなぜなのか。自然と疑問がわいてくる。出典がないことは何か意図があるのかと思ってしまうのである。

出典がない最初の読み物資料は「ネット将棋」である。「一 自分を見つめ伸ばして」の「二 自分で考えを実行し責任をもつ」に位置づけられている。

この資料を読んでいると、まずいつの時代の中学生かと思ってしまう。最初に時代錯誤かと感じてしまう。気軽に男女が会話しているし、教室で将棋をしている。大半の中学校では将棋ができるのは学校のルールがある。いつでもできるわけではないだろう。将棋の弱かった友だちがインターネット将棋で腕前をあげていく。その友だちがクラスのソフトボール部の女子生徒と勝負の厳しさを共有する。主人公は半ば納得いかないが、二人の話に耳を傾ける。どちらも試合の前と後で、「お願いします」「ありがとう、ございました」と言い、負けると「負けました」と言える試合にすることを友だちと女子生徒は話している。

インターネット将棋をしている主人公が最初と最後に挨拶すること自体、現実味がない。現在の中学生の状況を知っている方なら、この読み物資料に違和感を持つのではないだろうか。その上、「負けました」と言える中学生が存在するのかと思ってしまう。

この読み物資料のねらいは、「自己責任」である。人生

の勝ち、負けは自分で責任をとってください。人生をゲームやスポーツの試合にたとえているのである。その隠れたねらいを考えると、大変肌寒いものになってくる。

## 二 危険な臭い

### (一) 「海と空―かしの樫野の人々―」

「四 社会に生きる一員として」の「(一〇) 日本人の自覚をもち世界に貢献する」の読み物資料が、「海と空―樫野の人々―」である。

この資料にも出典がない。

内容を要約したい。昭和六十(一九八五)年三月、イラク・イラン戦争のさなか、イラン残留の日本人たちがテヘランから脱出しようとしていた。各国の航空機は自国民を優先し、日本人の搭乗の余地がなかった。日本人救済のために飛行機を出してくれたのが、トルコ政府で危機一髪のところ、日本人二一六人が無事脱出できたと資料の冒頭にある。

その理由として、「エルトゥールル号の遭難者を救助した樫野の人々」の話を展開する。

和歌山県串本の向かいの大島の樫野で、トルコの軍艦エルトゥールル号が遭難した。明治二十三(一八九

〇)年九月一六日夜、樫野地区の人たちは遭難したトルコ人、六十九人を救出した。その中でも、樫野崎灯台の当直が一人のトルコ人を助けた後、次々と樫野の人々はトルコ人を村に運び、「村の家々から浴衣を集めて、トルコ人のぬれた衣服と取り替えさせました。でも、なかなか冷えた体の震えは止まりません。樫野の人々は、一晩中、手や足、背中と体中をこすって温め続けたそうです」と美談に掲載されている。

エルトゥールル号は、トルコ皇帝の命を受け、答礼として明治天皇に親書と勲章を贈呈するためにやって来たのである。特使オスマン・パシャ一行を乗せたエルトゥールル号が帰りに樫野崎灯台下で遭難し、日本の軍艦「比叡」「金剛」によって、無事にトルコに送り届けられた。大多数の乗組員は故郷へ帰ることはかなわず、樫野崎の丘に埋葬されたことも付け加えている。

この読み物資料はイラン・イラク戦争の折、日本人をトルコ人が救出してくれた。明治時代、日本がトルコの軍艦エルトゥールル号の人々を助けたことを恩義に思っているからだとしている。トルコが親日的な理由にもあげている。「海と空」の水平線が一つになったと文学的に最後を締めくくっている。

しかし、この読み物を読んでいると、日本もトルコも軍隊の動きが基本になっている。現在の安倍政権の集団的自衛権の行使容認の問題をどうしても連想してしまうのである。

### (11) [saying 1]の人の1言

各項目の最初に「saying この人の一言」がある。二自分を見つめ伸ばして」の五項目について紹介したい。アリストテレス、ホラティウス、フランクリン、アウレリウス、スピノザ、魯迅、白州次郎、曾野綾子、井上ひさし、ユーゴー、アインシュタイン、サン＝テグジュペリ、世阿弥、西田幾多郎、河合隼雄たちの一言が載っている。

人物の一文だけ切つて紹介することは本意がまず伝わらないだろう。

その中で三人の一言を見てみたい。フランクリンは「早寝早起きは、人を健康で豊かで賢明にする」、曾野綾子は「人生において何が正しいかなんて誰にもわからないのだから、自分の思うとおりに進んで、その結果を他人の責任にしないことが大切ではないかと思う」、河合隼雄は「『自分だけだめじゃないか』という気持ち

をもっていないと、進歩がありません」となっている。文科省は、子育ては「早寝早起き」だと力説する。もちろん、生活のリズムを確立することは否定しない。

しかし、とりわけそれが子育てのすべてだというのは首を傾げてしまう。曾野綾子・河合隼雄はいわゆる自己責任論である。しかし、現在の社会の中で自分の責任ではなく、就職できない青年が存在する。すべて自己責任で通せることはできないのである。河合隼雄は「心のノート」を最初に作成した責任者である。「『自分がだめじゃないか』という気持ちをもっていないと、進歩がありません」と自己肯定感を否定する。現在の子どもがいつも自信がなく、否定から始まることを考えると、現実の子どもには少し離れている一言になる。

### 三 いくつか来た道

人格教育の重要性を協議するとして、超党派の「人格教育向上議員連盟（仮称）」（略「道徳議連」）会長：下村博文文部科学大臣）が六月の上旬に発足する。一八九〇（明治二十三年）年に発布された教育勅語を参考として教育のあり方を根本から見つめ直し、道徳の教科化の動きをバックアップするものである。

道徳議連には下村文科大臣のほか、民主党の笠浩史元文科副大臣、日本維新の会の中田宏国対委員長代理ら、保守系議員が一〇〇人規模での発足を目指している。発起人の一人は「子どものときに、知識の詰め込みよりも人格、教養を高めていくべきだ」として、道徳の教科化の必要性を強調している。現在の学力向上政策と整合性を欠いている。

道徳議連は、教育勅語にある「兄弟・姉妹は仲良くしましょう」「人格の向上に努めましょう」などの一二の徳目に着目している。下村大臣は「今でも十分に通用し、中身は普遍性がある」と教育勅語の精神を道徳教育にどう生かすかについてや「親のモラル低下も最近の教育問題の一つ」なども協議したいとしている。これらの道徳議連の動きに先駆けて、「私たちの道徳」はパイロット版の役割を果たし、まさに戦前の修身の教科書の現代版というべきものである。

人格形成に大切なモラルとは何かを国民的に議論を巻き起こし、政府の道徳の教科化は逆に一定の政府の意図があることを批判すべきであろう。

(こばやし あきら・中学校教員)

## 今年も開催 戦争展

戦争展運動とは一言で「過去の戦争体験を風化させないで、若い世代に伝承し、2度とふたたび戦争の過ちを繰り返さない世論を作り上げること」です。新潟県では、2009年から始められました。第3回からは、県戦争展実行委員会が作成したパネルを使用。

### 第3回戦争展の中心テーマ

・「満蒙開拓団・青少年義勇軍とシベリア抑留」

### 第4回戦争展の中心テーマ

・総点検 日本の15年戦争は何だったのか？

— 満州事変・日中全面戦争・太平洋戦争 —

### 第5回戦争展の中心テーマ

・アジアを平和と友好の地域に

— アジア諸国から信頼される日本に —

そして、今年行われる第6回戦争展の中心テーマは、

・日本はまた戦争するの？

— ここまでですんだ「戦争する国」づくり —

— いまを見つめ、過去と向きあい平和な明日を —

新潟会場は、8月22日(金)～24日(日)

県民会館3階ギャラリーBで。

(小東)